

# 『六合雜誌』における片山潜

辻野功

## はじめに

立身出世をめざしてアメリカ留学をした片山潜が、使命観に燃えるキリスト教徒としてあしかけ一三年ぶりに帰国したのは、一八九六年（明治二十九年）一月のことであった。片山はグリーンネルでマスター・オブ・アーツ、エール大でバチエラー・オブ・デイヴィニティの学位を得た洋行帰りの新知識人であった。その片山がまず第一に自分の意見発表の場としたのが、『六合雜誌』であった。もちろん植村正久と親しくなった結果、植村自身によって「片山潜氏の精到なる觀察も追々読者に紹介せらるべし」と紹介された『福音新報』にも健筆をふるい、また『国民之友』にもいくつかの注目すべき論文を発表した。しかし帰国後初めての論文「米国に於ける社会学の進歩」を発表したのは、『六合雜誌』においてであり、また『六合雜誌』に発表すること三六回という数の点でも、他の発表誌を圧倒していた。したがって「『六合雜誌』における片山潜」を研究することは、片山潜研究の不可欠な構成要素なのである。その『六合雜誌』と片山との関係がどのようにしてでき上ったか、詳しいことは分からない。ただ片山はアメリカ時代以来組合派のクリスチャンであり、帰国後は組合教会の「専門の牧師とか伝道師として」働くことを強く希望し

ており、また職を求めて同志社にきたことすらあった。<sup>(3)</sup> このような片山と同志社出身者がその主流であった『六合雑誌』との結びつきが生まれても、何ら不思議ではない。また特殊には、村井知至との関係が推測される。村井知至については、片山自身『自伝草稿』の「アンドヴァー時代」の章において、「此処は僕以前に新島襄が卒業したので、日本人は頗る評判がよい」と記した後、片山が入学した時には「村井知至と云ふ男が勉強して居った」と書いているが、村井知至の御子息村井勇吾氏の直話では、村井知至は家庭において、片山のことを「潜さん潜さん」と親しそうに呼んでおり、また「潜さんに社会主義を教えたのは自分だ」とも言っていたとのことである。ちなみに、日本社会主義史上初の体系的な社会主義の理論書である村井の『社会主義』は、一八九九年（明治三十年）七月に、片山の労働新聞社から発刊されたのである。このような関係にある村井が、片山を『六合雑誌』に紹介したことは、おおいにありうることである。

- (1) 植村正久「今後の福音新報に付きて一言す」『福音新報』第二卷第三号、明治二十九年七月一七日。
- (2) 片山潜『自伝』一九五四年（岩波書店刊）、二一〇ページ。
- (3) 加藤秀俊「片山潜のいくつかの書簡について」『人文学報』第二〇号（一九六四年一〇月）二〇七〜八ページ。
- (4) 片山潜「自伝草稿」『前衛』第一六一号（一九五九年一月）二二四ページ。
- (5) 同右。

## 一 社 会 学

片山が『六合雑誌』にまず第一に発表したのは、前述したように、「米国に於ける社会学の進歩」（第一八五号、明

治二九年五月)であり、次に発表したのが「社会学の綱領」(第一八八号、明治二九年八月)であった。また『国民之友』には「監獄改良論」(第三〇四・三〇五号、明治二九年七月)・「日本に於ける社会学講究の必要」(第三四八・三四九号、明治三〇年五月)を、『社会雑誌』には「社会学と社会改良との関係」(第一巻第一・二号、明治三〇年四・五月)を発表した。

以上から明らかのように、帰国した片山がなによりもまず訴えたかったことは、「社会学講究の必要」であったことが分かる。しかしここで言う社会学とは、現在我々が使っている学問分類上のそれではない。彼自身、「社会学の綱領」の中で社会学について次のように述べている。

社会学の真正の目的は実に人類の集合を研究するに要する規律の森嚴なる知識に外ならず而して社会学者は假令深奥高遠なる人性の全体を窮極する能はさるも然も人類の集合を整然たる規律の下に置いて其福利を増進するの方  
法を講究するものなり

社会学の綱領を究むるものに必要なるは先づ社会学の主義を確定し而して家族制度の進化、貧民の制度、慈善事業、犯罪及犯罪人、其他統計学経済学を研究することに在り真正なる社会学は是等数多の学術を総括して一頭地を  
其上に抜く所の高尚なる学問なり

片山の言葉は必ずしも明快ではないが、彼が言わんとした社会学は、社会問題の学であり、社会問題を解決して人

類の「福利を増進する方法を講究する」学であった。そのような社会学が、なぜどのようにおこったかを紹介したのが、「米國に於ける社会学の進歩」であった。その中で片山は、次のように述べた。元來「學術の勃興は社會の必要に本づく者多し、近世米國に於て社会学の勃興したるが如きは殊に然りとなす」とし、その経過を、米國は「彼の南北戰爭より以還國家の政權、一個の政党（改進黨）の翻弄する処となり漸を追て商工の実權亦其掌中に帰し……政界は放逸亂脈を極め」たが、「中流社會は二三年以降頗る奮起して米國社會の大改良に着手せり、是れ社会学の勃興せる所以」であると説いた。続いて片山は「一二の大學は社会学を学科中に入れ、機關雜誌に其結果を公告し、一般の同情を求めたるが爲め、今日に至ては、諸大學悉く其必要を認むるに至れり」と、アメリカにおける、特にアメリカの大學における社会学の進歩を述べ、さらに自分の母校であるアンドーヴァ神學校の例などを詳しく紹介したのである。

このような社会学こそ、彼自身がアメリカで最も熱心に学んだものであり、帰國の暁には日本で実践しようと志したものであった。そして「同志社連中が跋扈して、組合教會では働け」ず、さりとて「他派の教會で働くも余り面白くも無<sup>③</sup>」かった片山が始めたのが、キングスレー館であった。

口を糊するためアメリカ時代の親友杉田金之助の紹介で、東京専門学校で英語を教えたみたが見事失敗、「古る草履の如く解雇されて投げ出され<sup>④</sup>」てしまい、その後天然痘をわずらったりした後、アメリカ海外伝道協会のD・C・グリーンやM・F・デントンの援助で、神田三崎町一丁目<sup>⑤</sup>にキングスレー館を開いたのである。キングスレー館は、彼が英米で実地に学んできたセツルメントを参考にしたもので、その名前はおそらく彼が尊敬していたイギリスのキリスト教社会主義者キングスレーにちなんだものと思われる。このキングスレー館を、片山は日本における社会

学の研究と実践のセンターにしようとな願したのである。

ところで片山は「世間往々にして社会主義に社会学とを混視し又社会党と社会学者とを同視するものあり為めに社会学及社会学者は大に世人の擯斥する所となれり豈冤ならずや」と社会主義と社会学を峻別し、社会主義を「矯激悖戻の極端論」であるとして強く排撃したのである。

それでは後のコミンテルン幹部片山潜、日本共産党の父片山潜は、社会主義を否定したのであろうか。そうではなかったのである。そこに片山の矛盾があるが、今ここでは触れない。次に片山が社会主義をどのように理解し、どのように紹介したかをみてみよう。

- (1) 詳しくは拙稿「キリスト教徒としての片山潜」(『明治社会主義史論』一九七八年、法律文化社刊所収)参照。
- (2) 片山潜『自伝』(一九五四年、岩波書店刊)二一〇ページ。
- (3) 同右。
- (4) 同右。
- (5) 片山潜「社会学の綱領」『六合雑誌』第一八八号(一九九六年八月)二六ページ。
- (6) 同右二五ページ。
- (7) この間の矛盾の整合的説明は、隈谷三喜男『片山潜』(一九七七年、東京大学出版会刊)七六〜八二ページで試みられている。私もこの説に共鳴するものである。

## 二 社会主義理論

片山にとって、理想の人はマルクスではなくラサールであった。グリーンネル大学最上級生の時、ラサールの伝記を讀んでから「社会主義者になった」と言っている程、彼にとってラサールの影響は大きく、帰国後『六合雑誌』に三

回にわたって、「独逸社会共和党の創立者フェルヂナンド、ラサル」(第一九二・一九四・一九五号、明二九年一月・三〇年二・三月)を發表した。その中で片山は、「独逸の社会主義はラサルの創見に出つと云ふも過言にあらず。……千八百四十八年には全世界の社会に眼を放ち之れを改革發達せしめんとて欧米の下等社会を嘯集したるカル、マルクス、エンゲル等あり。然れとも其理想的社会主義を日常の政治的想像として之れを活用したるものは実にラサルの功なりと謂ふへし」とラサールをマルクスよりも高く評価して、彼の生涯を詳しく紹介した。さらに片山は続けて「フェルヂナンド、ラサルの社会主義」を三回(第一九六・一九七・一九八号、明治三〇年四・五・六月)にわたって發表し、次のようにラサールの社会主義理論を紹介した。

ラサルは……如何にせば此苦界即ち欠乏より労働者を救済し得るやに論及せり。全体の弊害の本源は資本又は担承者が生産の部分を横領するに在り。故に明白に適當なる改良は他なし實際の生産者をして其の全部を得せしむるにあり。是れ即ちラサルが与へんとする所の万病藥なりとす。

此問題に対してラサルが立案する所は……国庫の資本を以て組成したる生産工場に於ける労働者の組合なり。斯の共同(Cooperation)を以て労働者は又其担承人となり、彼の賃銀と利益の区別は消滅し去て生産物は生産家に歸すべし。

然りと雖も如何にして国家をして此生産組合に向て其資本を投せしむるを得るや。ラサルは斯の目的を遂ぐるの

手段として普通選挙権を得んとせり。以為らく若し国会をして普通選挙の下に成立せしめば断じて其の計画を成就し得べし。労働者が其の選挙権を左右するに至り其の勢力を国会に及ぼすに至れば彼等既に早く名義上の国家なりしものが茲に實際上の国家となるべきなりと。

片山はラサールのどのような点に共鳴して、マルクスより高く評価したのであろうか。理論の面では、ラサールの国家社会主義に共鳴したのである。「ラサールは当時の社会主義的運動に全然新分子を入れたる者にして……彼は真に近世独逸に於ける第一の国家社会主義者なり」と、片山は述べている。このようなラサールの国家社会主義こそ、片山の理想の社会主義であったのである。

さらに自らは上流階級にありながら、「社会を改良するの責任は上流社会の人士の頭上に在りと主張」して、苦しめる下層社会の解放のために闘い、「轍頭轍尾豪俠不撓の人」であったラサールの生きざまに、「米国文学博士」の肩書きを誇る片山は、強く共鳴したのである。かくしてマルクスでなくラサールが、片山の理想の人となったのであり、一連の論文の最後を次のような言葉で結んだのであった。

我邦も今や労働問題の工業社会を騒かすの兆候ありてこゝに社会問題研究の声を聞くに至れり。此の時に当り独逸国の如き経験に徴して我邦の現状を研究するは良法と謂はざる可からず。吾人はラサールの如き人士の出て彼のリカルド、ミル、マルシャル等の経済説を国民に教へんことを希望する者なり。吾人は我が労働者間に経済思想を与へ彼等をして文明的生活を望ましめんことを渴望する者なり。知らず日本のラサルは何処に在るやを。

ラサールの次に片山が紹介したのは、ロードベルトゥスであった。彼は第二〇一号（明治三〇年九月）に「国家社会主義の創唱者ロードベルトゥス」を、第二〇三号（明治三〇年十一月）に「ロードベルトゥスの社会経済主義」を発表したのであるが、その理由は「ラサル或はマルクスの所説に依て激励せられたらんも彼が感化を受け且つ採用したる説は寧ろロードベルトゥスの唱へたる所」<sup>(註)</sup>だったからである。

ロードベルトゥスを「国家社会主義の創唱者」として高く評価する片山は、ラサルとは異なって「社会問題の解

釈は経済問題の解釈なり、故に社会を改良するには政事に依らざるも経済の真理を實行せば足れり」とするロードベルトゥスの立場にその限界を認めつつも、「マルクス及びラサルの説きし主義が大抵ロ氏の主義を反復玩味して之に時流の衣服を着けしめて世に風聴したるに過ぎざりしを見る」として、ロードベルトゥスの社会主義を高く評価したのであった。

ラサール・ロードベルトゥスに比較し、片山がマルクスを論じたのは、ずっと後のことであった。第二四三号（明治三四年三月）の「『ダスカピタル』と其著者マルクスの地位」がそれである。片山のマルクス論及は、彼のラサール・ロードベルトゥス紹介に比べて大変おそかったばかりでなく、たとえば明治三二年五月の社会主義研究会の例会で、村井知至が「カール・マルクスの社会主義」と題する発表をしたのと比べてもおそかったのである。ちなみに村井の発表の前月の例会では、片山が「フェルヂナンド、ラサールの社会主義」を報告しているのである。いづれにしても、当初片山はマルクスをラサルやロードベルトゥスに比較して、高く評価していなかったものであり、したがって関心もそう深くはなかったのである。

片山が第二〇二号（明治三〇年一〇月）発表した「独逸に於ける社会共和党の発達」は、前後六回にわたったラサー



ルの紹介に続いて、「今や進んでラサルが蒔きたる種子の発生及び生長の如何」を紹介したものであるが、その中でラサル派とリープクネヒトが代表するマルクス派との対立を論じた。しかしその時点では、まだマルクス派をラサル派より高く評価することはなかったのである。

しかしその片山が、一九〇一年（明治三四年）の時点では「何人か十九世紀中に於て最も二十世紀の社会問題を導きたりしか、余は『ダス、カピタル』の著者カール、マークスを除いて他に之を見ることが能はず」とマルクスを高く評価し、マルクスの略歴と「社会主義宣言書」（『共産党宣言』）の概略を紹介するようになったのである。

このマルクスへの論及に先だつて、片山は第二三九号（明治三年一月）に「リープクネヒト」を発表している。その中で片山は、「リープクネヒトが独乙に於て将来万国社会主義を紹介し、遂にラサル党を凌駕するに至りたるは、マークスと親交を結ぶに至りたるに依るなり」、「吾人は彼が社会主義の為に努めたるの功は実にラサルに優る者あるを信ず」と、リープクネヒトを論じ、あわせてマルクスにまで論を及ぼしたのである。

片山がマルクスから受けた影響は何であつたろうか。その第一は、労働者が解放の単なる客体でなく主体となり、階級闘争によってその解放をかちとつてゆくのだという思想であり、その第二は、労働者の運動がインターナショナルなものだという「万国社会主義」の視点であつた。このような片山の思想の変化は、労働組合期成会を中心とした彼の実践活動と理論学習とがあいまって起こつたものと思われる。この変化は、後に述べる労働問題論に最もよく現われている。

### 三 社会主義の大勢

社会主義理論ないし思想の紹介と並んで社会主義運動の現状ないし社会主義の実現状況の紹介もまた、片山が『六合雑誌』で展開したテーマの一つであった。

すでに言及した「独逸に於ける社会共和党の発達」で、ドイツにおける社会主義運動の歴史を紹介した片山は、第二二八・二二九号(明治三年二月・三年一月)には、「欧州に於ける社会主義の大勢」を発表した。片山は冒頭で、「欧州に於ける社会主義が日に月に其勢力を得て今や將に社会の大部を支配せんとす」と、ヨーロッパにおける社会主義の大勢を概括した後、主要各国の状況を詳しく分析した。

イギリスでは、水道・ガス・電気・市街鉄道の市有を中心とした都市社会主義が実現しているのがその特徴であるとした。イタリアについては、「伊国に於ける社会主義者は英国に於ける兄弟の如く平和的発達進歩をなすあたはず」と分析し、フランスについては、「仏国の社会主義者は歴史的関係より諸派に分裂し統合の勢力なし、是れ同国社会主義者の一大欠点なりき」とした。

ベルギーについては、「白耳義国の社会主義者は伊国の社会主義者と異り大に其勢力を労働者間に占め、共働事業は社会主義運動の一大要素となりたり」と、これを高く評価した。デンマークについては、「丁抹に於ては、白耳義国に於ける如く、労働運動と社会主義の運動とは一なり、故に其勢力や他に優るものあり」、「今や丁抹の社会主義

者は十二ケの日刊新聞を有し、二万人以上の購読者を有せり」として、その運動の歴史を詳しく紹介した。最後に片山は、「社会主義は露、西、牙、の諸国に於て勢力を得つゝあり、吾人は其理想を以て全世界を支配するの日は近きつゝあるを見る者なり」と述べて、社会主義の将来が希望に満ちたものであるとの確信を披瀝したのであった。

「抑も社会主義は……今や試験の時代にあらず、実施の時代なり」とする片山は、「其最も著しき者は吾人彼の南洋の一小国新海国（ニュージーランド）に於て見るなり」として、第二四八・二四九・二五〇・二五一・二五四・二五五・二五六号（明治三四年八・九・一〇・十一月、三五年二・三・四月）に、「新海国と社会主義の実行」を連載した。

第二四八号では、ニュージーランドの「歴史」・「憲法」・「上院」・「衆議院」を紹介した後、片山は「政府」の項で、「社会問題及労働問題に対しては新海国は欧米の経験に徴して其弊害をさけ、進んで現今社会組織の病根を探究して之が救治に尽力し、大いに其好結果を得つゝあり」、「新海国には格外なる富豪家もなし又同時に貧民もなし、社会は健全なる発達をなしつゝあり」と述べている。

第二四九号では、「金融機関及貯蓄」・「国民の儲けと賃銀」・「鉱山」の状況を詳しく述べた後、「土地」の項では、「新海国の土地制度は世界にて有名なる単税制度」であると紹介した、第二五〇号では、「農業」・「牧畜業」・「交通機関及運搬業」・「郵便及電信」について、数字をあげて詳細に紹介し、特に交通機関については、「吾人は新海国に在りて交通機関の稍完全に近きしを見る者なり、如何となれば該国の方針は即ち人民の便宜を計るが目的なれば其鉄道は国有なり」と紹介し、これを高く評価したのである。

ここまでのニュージーランドの概括的介绍はいわば序論であって、以下の号で片山はニュージーランドの労働政策を詳細に紹介した。片山は第二五一号では、「新海国か過去十年間実行し来りたる労働政策は今日我邦の資本家及び

資本家に屈従せる卑劣なる学者輩が労働保護法及工場法に反対するの愚を証するに足るべし」として、ニュージーランドの工場法を、「工場登記」・「工場監督」・「工場規定」・「戸外業務に関する規定」・「工場衛生」の各項目について詳細に分析紹介した。そして最後に「吾人は工場法の研究を終るに当って一言せざるべからざる者あり、何ぞや他なし都ての規定には罰則の附随すること是なり」と、工場法に罰則規定の必要不可欠なることを力説したのである。

第二五二号では、「抑も労働者と言へば土万人足の特称の如く思慮する者あり、又労働問題と云へば工場内に労働する者のみに用ゆる如く見なすものあり、然れども吾人の解釈は此以外の者も含めるなり、人類の生存発達進歩に向つて必要な事業を執る人は悉く皆労働者なり、現時の労働問題は実に斯る者を指すなり、然り而して吾人か今研究せんとする労働者は商店商社に雇はれたる労働者に関してなり」として、ニュージーランドの「商店労働法」・「衛生」・「毎週半日休み」について紹介した。ついで婦人児童労働について、「工場に於ける婦人と小児」・「店雇の婦女と少年労働者」・「鉾山に於ける婦女子と小児」・「炭山に於て」・「機械及原動力と小児」の各項目について詳しく紹介したのである。

第二五五号では、「機械検閲法」を詳しく紹介した後、ニュージーランドの賃金制度について紹介した。「新海国に於ても「ツラツクシステム」は之を禁じ」られているとして、その「正金払」の制度を詳しく紹介した後、「無契約にて働ける労働者に向つての賃銀は必ず一週間毎に支払はざるべからず」との「受負事業に於ける賃銀」を紹介した。さらに「婢僕、農業労働者牧業労働者及び機械工等全て手工を以て労働賃銀を得る者」は、「正当なる手続を以て其土地の工場監督官よりの鑑札を有せざるべからず」との「手工登記法」を詳しく紹介した。

最後に第二五六号では、「組合法」・「産業調和及仲裁法」・「産業組合」・「産業協商」・「調和局」・「仲裁々判」・「判

決の施行」を詳しく紹介して、ニュージーランドにおける労資の紛争の仲裁がいかにうまく実現され、「新海国は社会主義を応用して労働問題の解決に尽力せし結果実に世界に無比なる好成績を得」、「平和の間に労働者も資本家も健全なる発達をなし」、世界中から「ストライキのなき国」と賞嘆されていると述べたのである。

以上が片山のニュージーランドの社会主義の紹介であるが、終わりに彼は、誰しもが感ずる疑問を次のように提起した。

世人或は云はん「此れ新海国の政策は個人的私有財産制度の範囲内に於ての改良進歩にあらずや。何処に社会主義の実行を見るや」と是れ一応最も問なり。

しかし片山は、この疑問に対しては、次のように答えて、ニュージーランドの現実を高く評価したのであった。

然れども吾人は今日の社会にては社会主義は行はれずと云はず。看ずや現時の産業組織は既に社会的なるを。又彼の鉄道の国有、郵便電信電話は社会主義を応用したる者にあらずや。新海国は他国の如私有財産制度の行はるゝ国なり。而して同時に社会主義も行はれつゝある国なり。

ヨーロッパ各国およびニュージーランドの社会主義の紹介からもうかがえるように、当時の片山の社会主義の中核は都市社会主義であった。片山が留学中から都市問題および都市社会主義にいかにか強い関心を抱いていたかは、周知

のことである。片山は第二〇五号（明治三二年一月）に、「欧州国民的生活の發達に於ける都府の地位」を發表して、都市の發達史を述べた。

さらに第二一三号（明治三二年九月）には、「歐米諸国の市長を論じて東京市に及ぶ」を發表した。この中で英米仏独の市長の制度を紹介し、アメリカについては、「米市に於て特色とすべきものは寧ろ悪しき方にありて吾人の習ふべきものなく只殷鑑として戒しむべきものゝみ」とこれを強く否定し、イギリスについては、「英市は自治制の最も進歩したるものなり」としてこれを高く評価した。それならば、東京はイギリスの市制を模範とすべきかと言えば、「吾人は今果して如何なる市長制が我が日本に適するやを論ずるの必要なし。蓋し日本の市制は独乙に模倣したるもの」であるから、ドイツの市制を模範とすべきだと論じ、さらに「日本が啻に独乙市制の外形法文を採用するのみならず、進んで其の精神を採用し実行せんこと」を希望したのであった。

この論文の延長線上に、彼は市制・衛生・交通・都市經濟・市民教育・慈善事業等、東京市で実施すべき具体的政策を、社会主義協会の第二二回例会（明治三三年二月二十五日）で講演し、その詳細は『六合雑誌』第二三一号（明治三三年三月）の「社会主義協会記事」において紹介されたのである。

#### 四 労働問題

片山が日本への帰国直後、社会問題・社会改良の重要な一環として、労働問題全般にそれ相当の関心と理解を持っていたものの、労働組合の組織とか活動にまで掘り下げた深い理解を持っていなかったことは、彼が次のように告白

するとおりである。

予はキングスレー館の主人株ではあつたが別に之れと云ふ定つた職業もなければ、又金まうけも為て居無いし、何も演説が上手と云ふ訳でも無く或は労働問題の専門家でもなかつたが、演説家の頭数には利用されて、何時でもきまつて出席して演説した。<sup>①</sup>

高野はゴンバースの労働運動を以つて理想として事実、彼は資本と労働の調和論者であつた。予は始めは鮮明な立場を持たなかつた。当時予の理想はラサールであつた。併し高野と一緒に演壇に立つて別に衝突した議論をしたことはない。<sup>②</sup>

しかしこのような片山の謙遜も、高野房太郎に対してのみあてはまるのであって、片山が当時最も進んだ労働問題の権威者の一人であつたことには間違いない。片山は『六合雑誌』第一九九号（明治三〇年七月）に、「労働団結の必要」を發表した。片山は冒頭に毛利元就の遺訓をひきながら、資本主義の急激な進展に直面しつつある労働者に団結の必要を説いたのである。

ただこの論文には注目すべき点が三つある。その第一は、「資本は……生産工業の原素にして、労働は生産の原動力なり、又富を産む母なり、兩者共に工業上欠く可からざる者なり」との認識、すなわち労資の真正な調和論からの「労働団結の必要」であつたということである。

第二に、したがって団結は同盟罷工を起すためではなく、同盟罷工を未然に防ぐためのものであったということである。この点について、片山は次のように述べた。

吾人は近時屢々同盟罷工の声を聞く、又労働問題は既に人心を煩すに至れり、吾人は今聞くか如き同盟罷工は甚た労働者のために望まざる所なり、蓋し同盟罷工は労働者が資本家の压制若しくは不当の処置に反対の旗を揚ぐる手詰の談判なり、決して軽卒に利用すべき方便にあらず、元来同盟罷工は労働者自ら非常の害を蒙り、資本家は不便を感じ、社会をして往々困難の位置に陥らしむるものなり。

労働団結は労働者に勢力を与ふ、又彼等の位置を堅固ならしむ、一朝彼等の間に団結成るの日は、彼等は前陳の如き多くの利益を得て漸々進歩し、資本家に向て応分の要求を為すを得べし、其の結果は同盟罷工を為すの要なきに至るべし、労働団結は恰も国家が陸海軍を拡張するは強ひて戦争するの目的に出づるにあらずして、却て平和を維持せん為なるが如し

第三に、この「労働団結の必要」は、必ずしも労働組合の結成のみを念頭においた呼びかけではなかったということである。いやそれどころか、片山は労働組合の具体的な組織には触れないまま、イギリスのロッチデールの「共同店」(「消費生活協同組合」を詳しく紹介しているのである。このことは、隅谷三喜男氏も言うように、片山が労働組合について深い知識がなかったことの反映であるばかりでなく、「共同店」が社会主義実現の重要な具体的な形態の一つで



あると、片山が認識していたことの現われでもあったのである。

片山は、第二〇〇号（明治三〇年八月）に「日本に於ける労働問題」を発表したが、その中で彼は「抑も吾人が労働問題を研究することの今日に急務なるを主張する所以のものは敢て平地に風波を起して社会の秩序を攪乱せんとするにあらず、其の解釈を講ずるは実には労働者に取て工業社会に取り又一般社会に取りて最大急務なりと確信するが故なり。……今日に在りて労働問題の必要を疑ふ者は猶ほ穴ある舟中に安坐して其の沈没の危険を顧慮せざる者」であると論じ、労働問題の研究が急務であることを訴えた。

第二二三号（明治三二年七月）に発表した「経済界の新現象」においては、まず「要するにラサルの主張する所は普通選挙及国家工場建設の二件」だとして、ラサールを歴史的に高く評価した。続いて「職工を屈服し小資本家を撲滅する而已ならず世界の市場に於て我が欲する儘に思ふ存分の価格を貪り専横を極めつゝあり是実に近時の新現象なり」として、トラストを説明した。

それならば、この「経済界の新現象」たるトラストに対し、労働者はいかに対抗すべきか。同盟罷工をもって対抗すべきか。片山は否と答える。同盟罷工はトラスト発生以前において、すでに敗れている。それはなぜか。それは、ラサールの立場とは反対に、同盟罷工が「経済問題即ち金力競争なりし為」であり、問題の解釈を経済の分野に限定したからであるとした。

それではトラストの発生しつつある今日、労働者はどのようにすればよいのか。片山は、次のように述べた。

蓋しラサルの所謂国家工場を起し普通選挙を得て而して堂々として国会議場に論戦し職工及資本家の関係を法制

的と為し時間賃金総て其規定を待つて両者の調和を得取て小數資本家の為めに工業界を踏躐せしめざるに如かず。

翻つて我國の労働問題は其基礎を經濟上に置くへき乎將た政治上に措くへき乎既に業に反復説明する所に依りて政治問題と為さざるべからざるは瞭然たり。

労働者はラサールの教えに従つて、普通選挙を獲得し、国会に進出し、立法によつて労働者の保護をはかつてトラストに対抗する。これがこの時点の片山の立場であつた。

第二二五号（明治三十三年九月）に發表した「今後の労働運動」において、「今日は正に研究の時代にして、労働者の実状を調査して如何にせば彼等が現に受けつゝある弊害を矯正し、進んで将来を予防し得るやの明答を案出するの必要あり」とした片山は、「労働者に関する統計は今後労働問題を研究するに当り、第一着に従事すべき事なり」と、きわめて重要な問題提起をした。

「今後の労働運動」の方針としては、もちろん労働組合を「労働者の位置を高め、技術を進め、其美德美風を養成するを目的となす」ものであるとして、その結成を奨励した。しかし片山は労働組合結成の奨励以上に、「吾人が今後特に力を尽さんとする所は組合組織にあらず。如何となれば組合を組織するも今日に於ては其目的を達するを得ざればなり」との観点から、「組合外にして最も急なるもの」として、「労働者の教育」・「労働者の信用を高めるの必要」・「労働者保護」の三つを力説した。

もちろんこの三つは労働組合結成とあれかこれかの関係にある訳ではないが、労働者が置かれている現状に鑑み、

労働組合結成とは独自に追求する必要を説いたのである。「労働者の教育」の具体例としては、高野房太郎が主張している職工教育奨励会や片山が実行しつゝあった大学普及講演、さらに社会問題講演会などをあげた。次に「労働者の信用を高める」具体策としては、「労働者より貯金を集めて資本家の機関に充」てるのではなく、「労働者間より貯金を集めて之を労働者間に流用するに勤」める労働者の信用機関と「共働店」(＝消費組合)をおこすことを主張した。「労働者保護」の項では、「吾人は今後工場法運動に先つて、幼年婦女労働保護を絶叫せんとす」との現実的な示唆をした。幼年婦人労働保護の必要は、賛否の議論のある労働者全般の保護に比べて、「調査せずとも知れ切つたる事実」だったからである。

「貧富の戦争」(第三三三・二三四・二三五号、明治三十三年五・六・七月)は、片山の労働問題観の画期的変化を示した論文であった。「現今の社会は共働主義を以て改造するにあらずんば必然破壊に至るべし。而して社会主義的国家を組織せんとするには社会的革命に依らざる可からず即ち都ての發達進歩の妨礙物となり国家の上に一大夢魔となりたる生産上に於ける資本家制度を廃棄せざる可からず、換言せば現在資本家と地主に所有され居る生産機関を国民の共有に帰すを意味する者即ち労働の機関(土地資本及機械等)の私有制度を全廃して之に代ふるに共有制度を以てするに在り」との冒頭の文章が、全編に流れる片山の思想を要約しており、そして題名の「貧富の戦争」が表わすごとく、これは彼にとって階級協調から階級闘争への転換の宣言書であった。

それでは、なぜこのような思想の転換が生じたのであろうか。片山は労資の調和を理想に掲げ、労働組合期成会の最高幹部の一人として、また『労働世界』の主宰者として労働運動に献身してきたのであるが、彼の指導する運動は決して資本家や政府と対立するものではなかった。にもかかわらず、片山は早くから危険人物とされ、運動もしばし

ば弾圧を受けた。そして一九〇〇年(明治三十三年)三月に政府が公布した治安警察法は、その第一七条が労働者の団結を禁ずることによって、労働運動に大打撃を与えたのである。

かつては隆盛に向かつていた労働運動も、当時すでに極度の不振に陥っており、その上に治安警察法であった。このような状況への片山の対応が、「今や治安警察法制定と共に既に開始した労働運動も其方針を一転して政事運動として決行せざる可からざる氣運に至<sup>(4)</sup>」れりとして「労働者独立政党を組織して平和の下に政事運動を為す事」および「政事運動の第一着として普通選挙を得るに極力先鋒を向くる事」であり、また「貧富の戦争」に展開した労資協調から階級闘争への転換であったのである。

「労働者の保護」(第二四六号、明治三十四年六月)は、サブタイトルが「我邦工業家の態度」となっているのが示すように、「我邦の職工を役させる雇主が如何なる制度を設けて労働者保護を為すと称するや、少しく冗長に渡ると雖も其条文を記して以て其性質結果を論せん」として、北海道製麻・秀英舎・日本鉄道大宮工場・東京砲兵工廠・沖電気の場合を詳細に検討したものである。片山はその検討を終わった後、「秀英舎はサスガは故佐久間貞一が熱心に職工保護を唱へたる結果として、今日も尚ほ其職工に対する正当なる処ありと雖ども、之れとても……曖昧の点なしとせず」と批判し、「吾人は職工保護は全然政府事業となすべきを主張する者なり、否な一步を進めて政府をして労働組合法を制定せしめ、之に依つて労働者自らが共働保険及救済をなし得るの途を開かんことを主張する者なり」と、力説したのである。

「資本と労働の関係」(第二五八号、明治三十五年六月)では、片山は「工業の進歩するに従ひ離業者の数は増加」し、そして「労働者は社会九分通りの消費者」であるから、「離業者」の増加はまた工業の不振となり、今や「離業者問題の解決は労働問題中最も困難なる問題」となっているが、それは「配財の当を失し」たためであり、労資間の「調和

改良問題は今や国家問題」となっていると、失業問題を初めて論じた。

続く号に発表した「労働界の難問題」（第二五九号、明治三五年七月）では、片山はさらに進んで失業対策を提起した。「現今の労働者の要求は賃銀の増額よりも時間の削減よりも地位の安固なるを欲するにあり」と、その失業の不安を述べた後、片山は「離業者救済策に二種あり、一は根本的改革にして離業者の出づる原因を絶つにあり、即ち現社会を改造して社会主義の世となすにあり……其二は現制度の下に於て改善するにあり」とした。そして現制度下の改善として失業者に国家が食料を与えて一時の救済をする方策、国家とか地方自治体が公共事業をおこして失業者を雇傭する方策などを示した。さらに「今一つの救済策は百年の事業にして、欧米及濠州は之が為めに労働局なる者を設置して全国に於ける労働者の需要供給を敏活ならしめ、以て其離業者を扶助するなり」として、労働局の設置を主張したのである。

「社会主義の反対者に答ふ」（第二六四号、明治三五年二月）は、題名のとおり、各種の社会主義反対論を理論的に反駁したものであるが、この論文の中で片山は、「根本的革新を期す社会主義と、「従来の主義を其儘にして其因つて来る弊害を矯正せん」とする社会改良主義とを峻別し、次のように述べて社会改良主義を否定し、自らの革命的立場を鮮明にしたのである。

吾人は信ず都て慈善事業都ての社会改良主義の政策は無政府党の爆裂弾と虚無党の暗殺と同じく最終の効果を奏せざるを信する者なり。

片山が従来信奉してきた社会改良主義は、一時の弥縫策としてのみ肯定されたのである。片山は次のように述べた。

吾人も今日の如き不公平なる資本的社会的の続く間は彼等改良主義者の唱ふる事業に賛成する者なり。然り双手を挙げて歓迎する者なり。唯吾人は此等を以て一時を弥縫する者として歓迎するのみ。

この論文は、片山が『六合雜誌』に発表した最後の論文であった。同じ『六合雜誌』の誌上で、社会学と社会主義の混視を遺憾とし、社会主義者を「矯激悖戻の極端論を唱導し建設的論者を指して社会の敵となし破壊的の一方に趨りて狂奔す<sup>(7)</sup>」る者だとしたかつての立場を考えると、この間の片山の思想の変化は目を見はらせるものであった。この号を最後に片山は『六合雜誌』誌上より姿を消すのであるが、それは片山が過激になりすぎて、特に片山だけが『六合雜誌』の編集方針と合わなくなったためというよりは、もちろんそれもあるが、『六合雜誌』全体が社会問題を論ずる姿勢を失い、片山にかぎらずかつて社会問題を論じた多くの人たちの論文が、誌上からその姿を消したのであった。

- (1) 片山潜『自伝』二二七ページ。
- (2) 同右二一八ページ。
- (3) 隅谷三喜男『片山潜』五七〇九ページ。
- (4) 片山潜『労働運動の前途』『労働世界』第五七号（一九〇〇年三月一日）。
- (5) 同右。
- (6) 同右。
- (7) 片山潜『社会学の綱領』『六合雜誌』第一八八号（一九〇六年八月）二五ページ。